

伊野川から忠別川までの地名⑧

今回と次回は、旭川のアイヌの人たちが、江丹別川から雨竜川筋へ山越えした、一交通路としての江丹別川について述べる。

安政四年(一八五七年)、松浦武四郎は、報文日誌「再篙石狩日誌」で、江丹別川の上流部には、掲載地図(明治三十一年製版複製五万図による地図)のように、サクル(sakuru 夏・道)とマタル(ataru 冬・道)の川があることを記録している。これは次回に紹介する。

松浦武四郎は、上川踏査の帰途、五月十二日(陽曆七月三日)から雨竜川を丸木舟で上り、翌十三日、掲載地図のチカポツ(cikapots 鳥が・沢山いる)に到着する。松浦武四郎は、ここで掲載地図のオサラッペ川から江丹別川を経由して、このチカポツ(松浦武四郎はチカホと表記)に山越えした二人のアイ

ヌの事跡を次のように記述している。

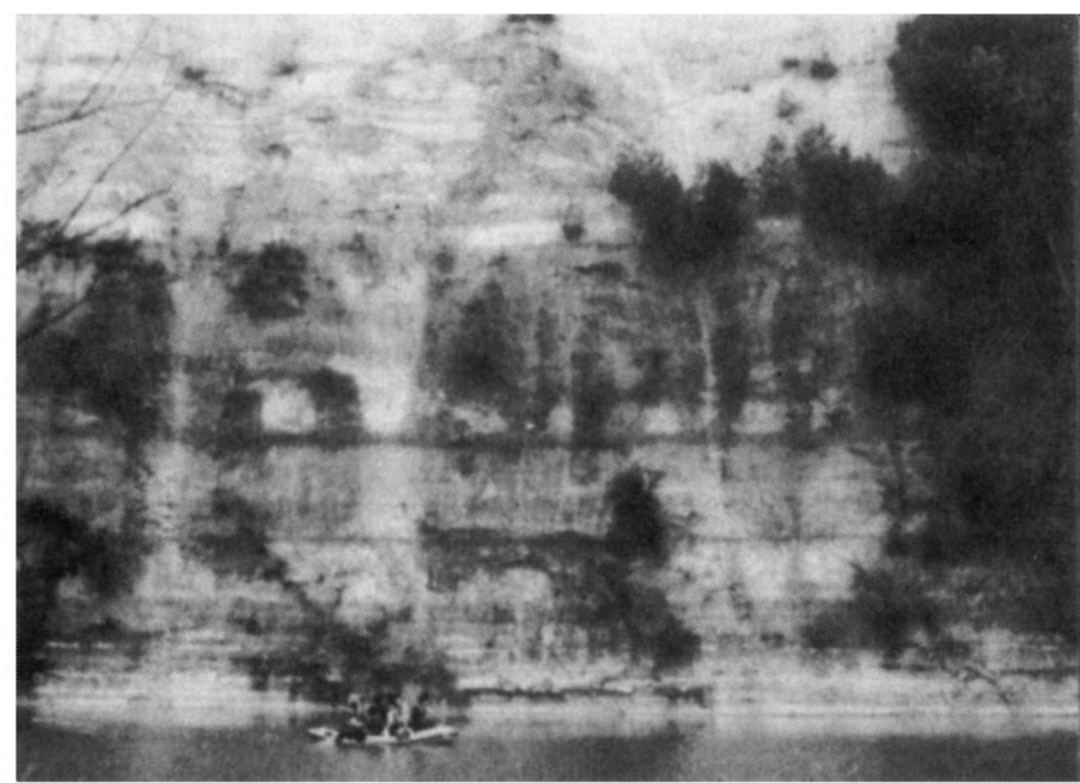
召連しシリアイノ、本川(註一石狩川)オサルヘツ(註一オサラッペ川)より一日にて此源に堅雪の節越えせし事有と云へり。

またトクヒラ惣乙名サヒテは、ヲサラヘツの上のトレフタシナイ(註一トウレフタウシナイ)より山越してエタンヘツの川上ホロヘツ(註一掲載地図のポンペツ)と云え出、其ホロヘツより山越にて此チカホと云え出し事有と云り。

松浦武四郎のこの記録は、非常に貴重なもので、アイヌの人たちは、ル(道)という名称が付かないところでも、縦横無尽に往来していたことを物語るものである。

しかも、松浦武四郎が記録したトク

①セヨピラをボートで下る ②チカポツ踏査―昼食



ヒラ惣乙名のサヒテが通ったという、掲載地図のチカポツには、現在は道路がないが、開拓期にはここにも江丹別の西里へ行く道路が付けられたという。また、オサラッペ川のトウレフタウシナイ(turep-ta-us-nay ウバユリの根・掘りつけている・沢)は、現在は主要地方道七十二号の「旭川幌加内線」が通り、この場所は「うばゆり峠」と言

われている。幹線道路でもある。今号では、松浦武四郎が記録した、トクヒラ惣乙名のサヒテも通り、かつては開拓期の和人も

追跡踏査を実施。一泊三日で、石狩川の合流点まで下った。昭和六十二年七月二十四日から二十六日までである。

次に、チカポツからポンペツの交通路踏査は、同年九月四日、旭川を車で午前四時出発、チカポツの林道約七キロ、終点から踏査開始、時に七時三十分。チカポツは蜂が多いとの注意を受けて、写真のように全ルート防蜂ネットを付けての踏査。水源までは川中を歩き、山越え部分は、背丈を超える熊笹が密生し難行、こっただけで三十分は要した。結局山越えまで五時間三十分、ポンペツの下りも岩場が多く三時間かかり、ここから江丹別中央まで一時間、合計九時間三十分を要した。松浦の記録のように、基本的には堅雪の頃でなければ利用しなかったと実感した。



断章 旭川のアイヌ語地名研究

119

高橋 基

追跡踏査を実施。一泊三日で、石狩川の合流点まで下った。昭和六十二年七月二十四日から二十六日までである。次に、チカポツからポンペツの交通路踏査は、同年九月四日、旭川を車で午前四時出発、チカポツの林道約七キロ、終点から踏査開始、時に七時三十分。チカポツは蜂が多いとの注意を受けて、写真のように全ルート防蜂ネットを付けての踏査。水源までは川中を歩き、山越え部分は、背丈を超える熊笹が密生し難行、こっただけで三十分は要した。結局山越えまで五時間三十分、ポンペツの下りも岩場が多く三時間かかり、ここから江丹別中央まで一時間、合計九時間三十分を要した。松浦の記録のように、基本的には堅雪の頃でなければ利用しなかったと実感した。

(アイヌ語地名研究会幹事) ※毎月第1週号に掲載します